

今昔物語

市制 70 周年を迎えた行橋市。山や海に囲まれ、京築地域の中核として人が行き交い、歴史と文化が育まれてきました。昔懐かしい行橋の風景や町なみの、「今」と「昔」をご覧ください。

～ Vol.027 連歌の里・行橋

「れんが」という音^{おん}を聞くと、多くの方は西洋建築などの資材として用いられる「煉瓦^{レンガ}」を思い起こすことでしょう。しかし、行橋では日本古来の文芸である「連歌^{れんが}」を想起する人も少なからずいると思われます。

「連歌」とは、複数の人が「五・七・五」(上の句)と「七・七」(下の句)を交互に詠み継いでいく詩歌のこと。古く奈良時代に原型ができ、鎌倉時代には百句を連ねて詠み継ぐ「百韻連歌^{ひゃくいんれんが}」が主流となり、続く南北朝・室町時代に大成。戦国時代には茶の湯や能などとならび武士の嗜みの1つとされました。

江戸時代には、松尾芭蕉によって芸術性が高められ、最初の句である「発句^{ほっく}」が重視されるようになります。これが独立した文芸として発展し、明治時代に正岡子規によって「俳句」と命名されます。

2004年 / 平成 16年

第 19 回国民文化祭・ふくおか 2004 連歌シンポジウム

明治時代以降、連歌は廃れていきますが、全国で唯一、現代まで連歌が生き続けたのがここ行橋の地でした。夏の風物詩・今井祇園祭では、室町時代の享祿 3 年 (1530) より連歌の奉納が続けられ、昭和 40 年 (1965) からは今井に「連歌会 (現在の今井祇園連歌の会)」が発足。昭和 56 年 (1981) には今井津須佐神社で日本初の連歌シンポジウムを開催。これを機に各地に連歌が再興され始めます。平成 16 年 (2004) 11 月には福岡県で開かれた国民文化祭で、行橋市を会場に文芸部門ではじめて連歌大会が行われました。



▲シンポジウムのサブテーマは「ひきつがれ ひきつぐ連歌 in ゆくはし」。11月6日にシンポジウム、翌7日に連歌実作会を開催した。

2024年 / 令和 6年

座で連歌に取り組む中高生

行橋での国民文化祭・連歌大会を機に、行橋市では連歌の普及を文化事業の主要施策の1つとし、毎年「行橋連歌大会」を開催するようになります。一般の参加者に加え、近隣の中高生にも広く呼びかけをし、気軽に連歌に触れる機会を創出し、近年は連歌を担う人材育成も兼ねて、中高生を対象とした「連歌教室」も開催しています。

今年も 11 月 8 日に、今井の古刹・浄喜寺を会場に節目となる第 20 回目の「行橋連歌大会」が催されます。



▲第 19 回行橋連歌大会での 1 コマ。連歌大会では「座」というグループに分かれ、半世吉 (22 句) の作品を完成させる。

行橋における連歌の復興、各地への普及、昭和と平成のシンポジウムの開催に尽力した人物がいます。今井津須佐神社の宮司であった高辻安親さんです。高辻宮司は現代連歌の「中興の祖」といえる存在でしたが、平成のシンポジウムを目前に亡くなりました。今井祇園祭、連歌復興に尽力した人生でした。

高辻宮司が愛した連歌は、5 年後の 2030 年に奉納 500 年の大きな節目を迎えようとしています。これを機に連歌の普及、啓発、後継者育成を推進し、500 年のその先の未来にバトンを繋いでいければと願っています。